

ひまわりからの メッセージ

60号

2016.4.11.

NPO ひまわりの花内
西濃園域
発達障がい支援センター

発行人: 中野たみ子

桜の老樹の下で

さ別れ、そして新しい出発に際して



この春、私は、ひまわり学園を卒業(?)しました。

実は、ひまわり学園長を退いた五年前に、すでにひまわり学園とは一線を画していましたが、いよいよ通い慣れた園舎ともお別れすることになったのです。

昨年の春、学園の桜の樹の下で、こんな歌を詠みました。

強風に散る、花片顔上げてこのひととせと心を決める

来る年の桜は吾のものならずひとり老樹と今朝を対き合ふ

人慈しむ心あるなし原点の福祉の姿勢をわが胸内に

私が大好きだった学園の老樹は、ソメイヨシノではなく、山桜に属する種でしょう。その樹は、今年の花を例年よりも少ないながらも、私に見せてくれました。何十年もの間、共に在った桜です。

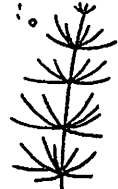
ざうざうした木肌に触れ、その温みを感じ、いのちを大切にすることと教え、見守ってくれた樹です。これから子どもたちのことを見守っていただけることでしょう。

さて、四月一日からは、特定非営利活動法人(NPO)ひまわりの花の本格的なスタートです。県の本許事業である西濃園域発達障がい療育地域支援センターの発達障がい専門支援員の仕事はそのまま引き継いでいきますし、NPOひまわりの花の活動に協力していただける方もあり、職員として週に数日来ていたくことになった高田美恵子先生とも協力し合って、今まで以上に支援の輪を広げていきたいと思っています。

長い経験から、危惧していることがあります。一つには、子どもと遊ぶ大人が少なくなったことです。幼い子は、遊びが生活そのもので、遊びを通して体も、思考力も、想像力も、人との関わり方や集団ルールも身につけていきます。けれど母と子(祖母と孫でもいいでしょう)が共感しつつ遊ぶことが少なくなってきています。

二つ目は、人と人の関わりの希薄さです。会話の減少は、子どもたちから語い数の獲得を遅らせ、表現する力を減少させています。暴言、暴力は、表現できない子どもたちのSOSに他ならないと思っています。まさに子どもたちの発達の危機です。

これから、どんな世の中になっていくのでしょうか……。



ただ、言えることは、私達大人がしっかりすべきことでしょうか。

新年度にあたって

く様々な立場の方々へ



四月。誰もが新たなスタートをきる時です。子どもたちも、

入学、進級、進学と、それぞれの歩みを始めたことでしょう。

「家であばれて困っています」。

「作業所に行かなくて毎朝が大変です……」。

「校長先生も代わられて心配です」。

「友だちなども配慮してクラス編成もして下さったようです」。

新年度早々、色々な電話がかかってきますが、不安と期待でいっぱいのお親さんと子どもたちの姿が目に見えます。おやうく園や学校で担任される先生方も、どんなクラス運営ができるか、支援の引きつぎはしたものの、どんな子なのか……とご心配になっておられることでしょう。

家庭で見る「個」の力とは違う「集団の中の力」

私たちが知っておかねばならないのは、家庭と園や学校での子どもの姿は違つて当然ということです。家庭の中で子どもたちが見せる「個」の姿と、学校から知られる姿の違いが、ややもすると園や学校と、保護者との関係を悪化させてしまっています。集団適応の力が弱い子どもたちは、家庭では見せない姿を集団生活の

中でぎらけ出してしまっています。ですから保護者の立場からは「そんなはずはない」「学校がきちんと見てくれない」という不信感になりがちです。

でも、考えてみて下さい。ゲームをしていると、いつまでもやっていて終われないということはないでしょうか。買ってほしい物があると、買ってもらうまでずっと言いつづけたリ、大声を出したりして要求を通してしまふことはいないでしょうか。家庭では何でも本人の言う通りになっていないでしょうか。

自分の気持ちに折り合いをもつけることが育てられていない場合、集団生活の中で行動をコントロールすることは難しいことでしょう。家庭のルールを考えてみませんか？そして、その中でまずは、本人が今、何をする時だったのかに気づけるようにしてあげることからがスタートと言えるでしょう。

乳幼児期に気づいてほしいこと

「うちの子は、ただことは遅いだけなのです」と、簡単におっしゃるお母さんたち。確かに、ことは遅いので、「ことは教室」や「児童発達支援事業所」(〇〇学園)に通われるわけですが、ただ、ことは遅いだけであれば、そういう所に通う必要はないと思います。「ことは遅れ」という現象面のことと背景に、例えば体のこととか、知的な発達のこととか、人との関わりの希薄さとか、ことは遅れに至る別の要因が考え

られるわけです。だから通園しているのです。

自分のお子さんのことばの遅れの要因を知るとは、とても重要なことだと思います。何故ならその後の子育ての中で意図的にどの様な働きかけや支援、指導が必要であるのか、保護者の方自身が知ること、子育てが変わってくるからです。「ただ、ことばが遅いだけ」と考えていつしやる方は、「ことばが出てきたから、大丈夫」と思われるでしょうし、その後、意図的な働きかけはなさらないでしょう。子どもの発達を考えたとき、環境との相互作用ということの大切さを私たちは、もっと考えていくべきなのです。

保育園や幼稚園の生活の中で、先生に……

このごろ子ども達の育ちは全体的に遅くなっていますし、ことばの指示が入りにくくなっているのではないだろうか。園の先生方は仕事量も増えて、なかなか子どもに一人ひとりに目を配ることが難しいことでしょう。集団活動からはずれてしまう子には、支援員がついてくれたりするので、お任せにしようことも多いのかもしれませんが、そういう園生活の中で先生方の大変さも知りつつ、お願いしたいことがあります。

まず、先生方のことばの指示が入りにくい子がいること、自分では、しっかり聞こうと思っても、周りのことに気を取られてしまっている子がいること、そしてそれは、その子の意思ではないという

ことを分かってほしいと思います。そして、「くしちやダメー」と叱られても、何故叱られたのか分からない子もいます。

感覚の過敏や鈍さはないか、発達のアンバランスはないか、ことばの指示が入りにくい子ではないか……等々、子どもたちが何に困っているのかを、先生自身がいかにしっかりと伝えておいて下さい。そうでないと、次の有効な手だてを見つけれないでしょうから……。

そして、困っていることも、困っていると意思表示できる子に育てほしいのです。困っていることを伝えられなくて、ますます困っていつてしまうということは、成人になってもよくあることなのです。

知的学級に入級している子どもたち

大学時代、私は知的障がいの子の施設に入りびたっていました。その時、同級生に「この子らが百年生きたら、他の子に追いつきますか?」と聞かれたことがありました。答はNoです。文科省（昔は文部省と言いました）も以前には「就学猶予」という制度を作っていました。他の子よりも一年、あるいは二年、小学校入学を遅らせれば皆と同样様に学んでいけるのではないかと考えたからです。しかし、そうではありませんでした。抽象概念の苦手な子どもたちは、より高度な学習のペースについていくことは困難だったのです。

しかし、具体物を使う学習や生活単元学習といって生活に根ざした学習を通して、子どもたちはどんどん大きくなり、生活力をつけていったのです。

知的障がいのある子をおもちのお母さんは、是非、お子さんに生活力をつけていってあげて下さい。料理を作る、洗たくをする、片づける、信号を一人で渡る、自転車に乗る、切符を四角う、電車で並んで待つ、席がなかったり立つ、車内を走り回らない等々、将来の移動手段や生活していくために必要なことを身につけてあげてほしいと思います。

学校ではプリント学習が多くなっているように見受けられますが、子どもたちが生きていく力に結びついたものを是非考えてみて下さい。机上の学習で学ぶことの苦手な子ですから……。

情緒入級や通級の子どもたち

なぜ、僕は通級に行ってるの？」「何故、私は皆とちがうの？」「小学校の高学年にもなると、こんな質問が、お子さんの方から出されることもあるでしょう。そんな時に、お子さんの良いところと、でも少し苦手なところを伝えてあげられたいと思います。そして、苦手なところを他の人に助けてもらう、いいこと……。

成人してから、職場で失敗ばかりするので居づらくなってしまう人や、家庭生活がうまくいかなくなってしまう人もいま

す。でも、自分のことを知るということが、まず大切なことです。周りの理解がないと、自分はダメな人間だ、生きている価値がないのだと思い込んでしまうことも、よくあることです。そんな時でも、本人のつらい状況をわかってくれる人がいて、困っていることを一つ一つ解決していけるように考えてくれたら、どんなに良いでしょう。

発達障がいについての理解は広がってきましたが、まだまだ十分とは言えません。様々なケースを通して具体的な方法を担任の先生や保護者の方と一緒に考えてきたつもりですが、何故かそれが本当にその子の育ちに役立ったのだろうか……と思います。けれども長年かかわってきたと思うことは、家庭と学校が協力し合っていないと、子どもたちの育ちを支えていくことはできないということとです。社会性が幼く、コミュニケーション力の弱い子どもたちが将来自立していくためには、自分自身の気持ちの切りかえや折り合いのつけ方を学んでいく必要があります。そのためには、時間が必要ですし、支援のバトンを引きついでいかななくてはなりません。私たち一人ひとりが責任をもって子どもたちに向き合っていかなければ、二次障害は無くなっていきません。お父さんやお母さんも、他人まかせにせずに、でも時には肩の力を抜いて、一緒に歩んでいきましょう。

次回親の会 5/9 中川ふれあいセンター

6/20(カミ)

